

日本建築学会北海道支部
2003年度 通常総会

日時 2003年5月16日(金)
会場 北方圏センター国際会議場

日本建築学会北海道支部

日本建築学会北海道支部 2003 年度総会議案

2002 年度事業報告

1．支部運営の諸会合の開催

総会

期日 2002 年 5 月 17 日

会場 北方圏センター国際会議場

出席正会員 39 名（委任状 35 通）

当支部地域在住正会員 974 名の 30 分の 1、32 名以上の出席により成立

2001 年度事業報告および収支決算、ならびに 2002 年度事業計画方針案および予算案を審議し、異議なく可決承認された。

常議員会

6 回開催

常任幹事会

5 回開催

選挙管理委員会

1 回開催

2．学術系委員会の活動

2.1 学術委員会（主査：星野 政幸君 委員数16名 委員会開催数4回）

主要な報告事項と議題を以下に要約する。

第 1 回目（7 月 11 日）：本部学術推進委員会報告（以下本部報告）、各専門委員会及び特定課題研究委員会の活動状況、予算配分の確認、支部研究発表会の総括と次回の開催地の検討、建築文化週間（10 月 4 日）：本部報告の進捗状況

第 2 回目、各専門委員会の活動状況の報告、次年度特定課題研究委員会・建築文化週間の募集要項の検討、支部研究発表会の開催地及び募集要項の決定、大賞候補者の選考

第 3 回目（12 月 12 日）：本部報告、支部常議員会報告、各専門委員会の活動状況の報告、支部研究発表会の「特別企画」の検討、建築文化週間の実施報告と次年度の特定課題研究委員会・建築文化週間の募集について

第 4 回目（2 月 17 日）：本部報告、支部常議員会報告、各専門委員会及び特定課題研究委員会の活動状況の報告、来年度事業計画・予算案の検討、次年度の特定課題研究委員会・建築文化週間の説明会と審議及び選考、支部研究発表会の準備の進捗状況

2.2 専門委員会の活動

材料施工専門委員会（主査 名和 豊春君 委員数 22 名 委員会開催数 5 回）

本年度は、専門委員会を2ヶ月に1回程度の割合で、計5回開催した。委員会では、本部材料施工本委員会など各種委員会報告や諮問事項について検討し、材料・施工に関する情報や意見の交換を行った。また、興味ある話題や今日的な話題について事前に担当を決め報告をしていただき、最近の研究動向について意見の交換を行った。

2002年7月12日には、HIRC造、高強度（鉄筋・コンクリート）RC造、柱・床・バルコニーのPC化など道内ではまだ例の少ない施工法を採用したマンション「ライオンズタワー山鼻」施工現場の見学会をおこない、17名の参加があった。また、11月6日には旭川の北方建築総合研究所の見学会を行い、21名の参加があった。また、2002年9月26日に北海道大学学術交流会館において「寒中コンクリート施工支援システム」講習会を開催し、131名の参加者があった。

道内巡回講演会は2002年10月30日に札幌工業高校に赴き、建築科3年生71名を対象に免震構造など「新しい建築技術」について講演を行った（講師：那須豊治委員）。

構造専門委員会（主査：武田 寛君 委員数 20 名 委員会開催数 4 回）

・トロハ展への協力

スペインの建築家トロハの展示会とチャレンジ展が 2002 年 6 月 22 日から 7 月 7 日の 16 日間にわたり、札幌市の青少年化学館で開催。発起人代表は旭川東海大の粉川先生。

構造専門委員会は協力することにした。学会支部から 17 万円の補助をいただいた。

チャレンジ展の全国大会が 10 月 12 日に東京銀座資生堂であり、北海道代表の 2 名がダブル優勝した。

・講演会

Jack Moehle（カリフォルニア大学バークレイ校）教授特別講演会

5 月 16 日(木)に K K R 札幌で開催

演題 既存建物の耐震性予測と修復における性能評価に基づく地震工学の実務的応用

・工業高校巡回講演会

東海大学 粉川先生 テ - マ「氷のド - ム」 室蘭工業高校で講演

・都市防災専門委員会と合同で委員会を開催。

環境工学専門委員会（主査：福島 明君 委員数 24 名 委員会開催数 5 回）

委員会のテーマとして設定したシックハウス関連の活動として、来年度予定されている建築基準法の改正に対して、支部委員会として対応を協議した。建材の規制と共に換気装置の設置義務づけが提案される中で、寒地の特性を生かした自然換気の対応をどのように取り扱うかなど、精力的な議論を行った。国土交通省から公開された基準案に対して、地域の特性を考慮するよう、パブリックコメントを提出した。2002 年 11 月 18 日に開催した道立北方建築総合研究所の見学会では、環境との共生に向けて何ができるか活発な議論がなされた。これを受け、2003 年 3 月 13, 14 日に約 80 名の参加者を得て開催したシンポジウム「地域・環境・建築・人間 自然からちょうだいする」では、地域の建築産業が地球環境時代に向けて進むべき方向について活発な議論がなされた。引き続き地域の環境共生型の建築をめぐるツアーを開催し、地域の建築関連産業を守り育てる方向について意見交換を行った。

建築計画専門委員会（主査：門谷 眞一郎君 委員数 21 名 委員会開催数 5 回 ネットミーティングを含む）

2001 年度に引き続き、個々の研究者や実務者が抱える個別の課題領域に偏らない統一的なテーマの下に活動ができないか議論の展開を図った。個々の研究や実践のあり方については、その道の考え方を尊重しつつ、特に、学会の活動として、それらを社会還元に導く一定の方途がネットワークの活用によってある程度の可能性があると考え、主査の居所に Web サーバを用意した。現在、継続的に運用上の問題点の整理を行っているところである。市民生活、特に地域の住民と建築との接点に焦点を当て、計画や設計の事例を広く取材し整理するとともに、単なる研究成果に止まらない、むしろ生きた参考データ集として、オープンにしていく必要があるとの判断である。

都市計画専門委員会（主査：瀬戸口 剛君 委員数 15 名 委員会開催数 4 回）

都市計画委員会では、北海道内の都市で大きな課題となっているコンパクトシティとまちなか居住に関する研究会やシンポジウムを一貫して続けており、今後とも継続する予定である。委員会では委員のみではなく、都市計画関係者や一般市民を含めた研究会やシンポジウムを行っている。12 月には講演会「Urban Design for Winter Cities」(約 50 名参加)を、1 月には「コンパクトシティとまちなか居住を考える研究会」(68 名参加)を、道外より講師を招いて、北海道開発局および北海道庁の後援で行っており、参加者より好評を得ている。3 月には札幌市住宅企画課と共催で「まちなか住まい」シンポジウムを開催した。また、2002 年度大会での研究協議会に参加し、その成果の出版企画に 3 名の委員が関わっている。

歴史意匠専門委員会（主査：伊藤 寛君 委員数 18 名 委員会開催数 5 回）

2002 年度も、道内各地における歴史的建築物の現状把握と発掘、および保存・活用に関する情報交換を積極的に行い、社会や住民へ広く貢献することを目的に活動を行った。委託研究として稚内市歴史的建造物基礎調査業務を受諾し、稚内市旧海軍通信施設および歴史的建造物の調査を

行い、報告書をまとめた。また、函館市旧東川小学校校舎保存要望等にも関わった。建築文化週間企画として「建築散歩 - 毛綱毅曠の建築を巡る(釧路編)」を10月6日(日)に開催し、地元新聞のPR、一昨年開催の毛綱毅曠展やシンポジウムに対する反響もあって、53名が参加する盛況であった。ガウディ生誕150周年を記念して、7月に江別市でガウディ展、9月に田中裕也氏(ガウディ研究家)講演会を行った。道内高校巡回講演会では、10月30日に小樽工業高校で水野委員、10月31日に苫小牧工業高校で中渡委員が講演を行った。

北方系住宅専門委員会(主査:長谷川寿夫君 委員数21名 委員会開催数8回)

昨年度までの2年間、持続可能な成長と社会を主題として、その具体像・ライフスタイルを探るための討議を行い、各委員が1)新しい成長への出発、2)持続可能な成長への提案として執筆したものを、2002年1月に小冊子「雪休日の楽しみ - 良さ発見型の成長へ - 」(A4判70頁)に取りまとめた。本年度はこの内容の普及を図る目的もあって、当委員会から申請した建築文化週間の支部主催行事:シンポジウム「つながりが生まれる公園づくり」を10月に滝川市において開催し、約60名の参加があった。

委員会の今後の研究内容を討議し、「住宅の建て替え実態調査」について、住宅金融公庫北海道支店の協力を得てアンケート調査を実施し、現在取りまとめ中である。また、地球環境を考えた取り組みについて研究活動方を討議し、具体的には「社会資産としての住居の育成に向けて」のテーマで委員会内部にWGを設けて動き出すこととした。

都市防災専門委員会(主査:岡田 成幸君 委員数19名 委員会開催数10回 <通信委員会を含む、内1回は構造委員会との合同開催>)

委員会内は大きく[1.常設WG]と[2.研究WG]に2分されており、さらにそれぞれに4つのサブWGを設けて、通常はWGごとに活動し、本委員会においてWGからの活動報告をもとに議論を行っている。

[1.常設WG]では、イベント企画WGは、見学会企画WGと共同で有珠火山災害被災地見学会を企画。学術企画WGは、特定課題本部助成申請にかかるテーマを審議。見学会企画WGは、有珠火山被災地見学会と道立北方建築総合研究所の施設見学を企画実施。広報WGは、当委員会作成のホームページの更新等を行った。

[2.研究的WG]では、有珠火山噴火調査WGは、特定課題研究の申請内容を審議し、本部助成の特定課題研究として採用。防災マップ活用WGは、マップの具体的な活用方法について議論。意思決定問題WGは、災害時調査マニュアルの改訂作業を担当。避難問題WGは、災害時の避難にかかる諸問題の研究を担当。

2.3 特定課題研究委員会の実施

北海道住宅エネルギー消費実態調査研究会(主査:藤原陽三君 委員数4名 委員会開催数3回)

近年、高断熱・高気密住宅の普及が著しいが、暖房空間の広がりや室内温熱環境の安定化や、それらによる住まい方の変化などにより、暖房用等のエネルギー消費が減少しない傾向がみられる。本研究では、(財)北海道消費者協会・石油連盟によって実施されている本道の住宅用エネルギー消費実態アンケート調査結果などをもとに、道内の住宅におけるエネルギー消費実態を把握し、本道のエネルギー消費の大きな部分を占める住宅用エネルギー消費の省エネルギーの方向性を明らかとすることを目的とする。

2002年度は、2001年度のアンケート調査結果をもとに、戸建及び集合世帯の用途別燃料消費量(用途は暖房、給湯、融雪、燃料は灯油、電気、ガス)の推計、及び、高齢者を切り口とした分析を行った。

積雪地昼光利用研究委員会(主査:斉藤 雅也君 委員数7名 委員会開催数2回)

冬季の積雪面を光源とした室内照明の利用方法やそれにかかわる技術の開発を目的として研究活動を行なった。2002年度は、昼光利用を目的としたライトシェルフのある執務室の光環境実測(北海道立北方建築総合研究所)、昼光利用に関わる簡易ツールの開発(北海道大学)

窓の配置・形態の違いが室内での光・熱環境に与える影響に関する実験（札幌市立高等専門学校）の3テーマに分かれて研究を行なった。2002年度の構成委員数は7名で、委員会は2回（札幌・旭川）開催した。2002年度の研究成果はまだ公表していないが、2003年度の日本建築学会大会（9月）・北海道支部（6月）にて公表する予定である。

建築鉄骨技術教育研究委員会（主査：田沼 吉伸君 委員数7名 委員会開催数4回）

北海道内の高専・工業高校への建築鉄骨技術教育教材として、昨年度製作した模型教材および建築鉄骨の製作過程の写真を編集した副教材を用いた試験的授業を3校4クラスで実施し、受講した生徒から授業評価アンケートを回収した。授業評価結果は理解度の面では概ね満足すべき結果が得られた。当委員会で提案した模型教材は、道内の工業高校の建築科で組織されている北海道高等学校建築教育研究会において写真および図面で報告し、副教材については各校に一部配布した。授業評価結果と授業実施者の報告に基づき、模型教材に関しては授業時の機動性を確保させる工夫を行い、更には、溶接部の部分模型も別途製作し、最終提案に取り入れた。副教材に関しては各写真を拡大し、より見易くした教材を最終提案とした。

公表した報告等

1. 道内高専・工高に対する建築鉄骨技術教育教材の提案：センターレポート第141号（財）北海道建築指導センター、2003年3月
2. 北海道の高専・工業高校に対する建築鉄骨技術教材の提案：第51回工学・工業教育研究講演会(2003年9月)、投稿中

2.4 本部からの支部助成金による研究委員会の実施

旧師団施設調査研究委員会（主査：川島 洋一君 委員数11名 委員会開催数4回）

当委員会は明治32年旭川に設営された旧第7師団の施設について保存資料や現存建物の建築状況を明らかにし、北海道の近代建築史の一部を明らかにする事を目的として昨年、本年の二年間の活動を行った。本年度は現陸上自衛隊美幌駐屯地内の旧海軍美幌航空隊施設で現存木造平家1棟の実測調査を行い、平面立面断面及び一部小屋組図を作成し建築技術の特徴、そして同駐屯地の史料館北辰館での旧軍関係資料収集状況について、前年の成果を踏まえての考察を行った。更に現真駒内駐屯地での資料収集、十勝沿岸ト・チカの所在確認、外観調査も行い、これらの成果を2003年度支部発表会で公表予定。当研究2年間の活動報告としては2回の支部発表での成果とし、研究全体への分析、考察については今年度中に実施する予定。

3. 委託調査研究の受託

契約年月日	委託調査研究名	担当委員会（代表者）	委託者
2002.6.18	稚内市歴史的建造物基礎調査業務	歴史意匠専門委員会 （主査 伊藤寛君）	稚内市

受託の概要

- (1) 稚内市歴史的建造物基礎調査業務（受託金額：2,500,000円）

稚内市旧海軍通信施設及び歴史的建造物について、施設の沿革、現状調査、老朽度調査、復元の基本方針の策定と復元図の作成、市内歴史的建造物の分布などについて調査した。

4. 研究発表会の実施（主査：桜井 修次君 委員数19名 委員会開催数6回）

2002年度の委員の任期は、2001年7月2日(第74回研究発表会翌日)から2002年6月30日(第75回研究発表会最終日)である。以下の報告は、上記期間における委員会報告である。

- 1) 第75回支部研究発表会日程と会場の決定

- 2) 支部研究発表会の論文原稿種別、発表形式の確認と決定
- 3) 論文執筆要領の作成と原稿募集記事の建築雑誌掲載
- 4) 特別企画のテーマ募集および特別企画テーマの選定
- 5) 論文原稿の受付・編集作業の実施、研究発表会プログラムの編成および建築雑誌掲載記事の手配

6) 第75回支部研究発表会の実施

期 日 2002年6月29日(土)、30日(日)

会 場 室蘭工業大学

発表論文は、123題(A原稿:80、B原稿:24、C原稿:16、D原稿:3)であり、研究報告集No.75を発売した。あわせて第73回、74回の計画技術報告の総評も掲載した。なお、30日には、「特別企画:有珠の災害現場を歩く~2000年有珠山噴火の被害状況及び噴火口の見学」を実施し、42名の参加があった。

5. 表彰

5.1 北海道建築賞

- (1) 北海道建築賞委員会の活動(主査:小林 英嗣君 委員8名 委員会開催数 5回のうち現地審査3回)

本委員会は北海道支部の表彰制度の設立と同時に1975年に設けられた委員会であるが、2002年度の建築賞の選考は、昨年度と同様に建築作品を支える「先進性」、「規範性」そして「洗練度」に基づいて行われた。この3つの視点の存在とその明快さが学会が行う建築賞の特徴であることが再確認され、且つおのおのが一定水準以上の内容であることが必要不可欠であるとの判断に基づき、長時間の熱心な議論を伴いながら、かつ慎重に選考が行われた。選考の結果、北海道建築賞は該当作品なし、北海道建築奨励賞として「北海道工業大学新講義棟Gの設計」(佐藤 孝君・北海道工業大学、鈴木 健夫君・清水建設(株)北海道支店)、北海道建築賞審査員特別賞として、「素材・尺度・光の変化による群としての空間設計手法」(中山 眞琴君・ナカヤマ・アーキテクツ)を本年度の授賞対象とした。委員会における選考の経緯ならびに対象となった作品概要と委員会の講評をリーフレットとして取りまとめて公表する。

- (2) 受賞者

北海道建築賞 該当作品なし

北海道建築奨励賞 佐藤 孝君(北海道工業大学)
鈴木 健夫君(清水建設(株)北海道支店)
作品名 - 「北海道工業大学新講義棟G」の設計

北海道建築賞審査員特別賞 中山 眞琴君(ナカヤマ・アーキテクツ)

作品名 - 「素材・尺度・光の変化による群としての空間設計手法」

- (3) 審査経緯

本年度の審査の対象作品は、応募全作品の8点、建築作品発表会発表作品から2点、計10点とした。第1回審査会は全メンバー参加のもとで開催され、昨年の委員会の経緯・審査の視点について意見交換を行い、今年度の審査方針を確認した。その後、書類選考によって審査が開始され、審査委員の推挙作品と推挙の理由に関する討論を経て、現地審査の対象とすべき候補を4点に絞り込んだ。

応募作品からは小樽旅亭「葎群」(中山眞琴/ナカヤマ・アーキテクツ)、北海道工業大学新講義

棟G（佐藤孝／北海道工業大学、鈴木健夫／清水建設㈱北海道支社）作品発表会からは、北海道立北方建築総合研究所（基本計画：北方建築総合研究所・アトリエブク、実施設計：北海道建設部建築整備室、中原・アトリエブク・柴滝）、日藤メモリアルガーデン（堀隆文・片瀬利行／㈱竹中工務店北海道支店一級建築士事務所）の4点であった。

しかし、新しい地平を切り開くような作品や新たな問題を投げかけようとしている建築、そして魅力的な建築観・デザイン観を秘めた建築が少なく、いずれも習作的あるいは主観的な形態操作に終始している作品が目につき、低調であったというのが審査員全員の実感であった。建築賞の審査・選考の視点は、「計画理論や設計・デザイン」に対しての「新しい挑戦・問題意識」、新しい人間・生活・環境の構築への意欲とビジョンに対する「ラディカルな追求」、加え、それらの「社会性」と「規範性」を建築学会が優先させるべき価値とし、「新鮮、ラディカル、そして洗練への努力」であり、北海道建築賞の選考と審査の視座を明確にして進めた。また候補作品は全て複数の委員が現地審査を行うという原則も了承し、審査を開始した。3月11日、全ての候補作品の現地審査を完了し、最終選考の委員会を開催した。それぞれの建築について、建築作品の特徴と評価すべき内容、設計や計画のプログラムとコンセプト、デザイン性を支えている論理性の今日的な意味などについての議論が展開された。単なる機能性や空間性や形態などの表層的・恣意的な意匠や造形にとどまらず、それらを生み出した建築家の視座、プログラムや方法論、そしてその完成度や社会性などをめぐる意見が長時間にわたって交換され、委員の情緒や感性や好みに基づいた曖昧な議論ではなかった。

「北海道工業大学新講義棟G」は、同大学の主たるキャンパス軸に隣接した、大学フレッシュマンの教育を行う総合講義棟であり、それゆえキャンパスランドスケープの構成上からの入念な配慮と建築計画上の配慮、そして外部・内部の相補性への配慮がほどこされた空間デザインが不可欠となる建築である。また、キャンパス内の施設は、オン・カリキュラム時に必要な機能的空間構成とオフ・カリキュラム時に発生するキャンパスライフへの配慮とが同時に必要となり、それゆえ内外部の空間が連動した豊かさと魅力が求められる。

この新講義棟は従来の定式化された大学講義室と比べ建築内部と表層へのデザイン上の配慮と工夫が十二分にほどこされており、その試みは評価したい。しかし、キャンパス構成上の軸線／動線／諸室配置はオン・カリキュラム上の合理性よりもむしろ設計者の建築形態上の操作（特に中央吹抜け空間のデザイン）のための主観的な見解として理解せざるを得ない。それゆえに生じるキャンパス内にあるべき（オン・カリキュラムとオフ・カリキュラムの両方のキャンパス生活を包み込むべき）施設としての建築空間の緊張感、包容感の欠如、またキャンパス外部空間との断絶性が随所に見られ、審査員全員の合意で奨励賞とした。

「小樽旅亭・蔵群」は、オーナーのホスピタリティと設計者の建築手法のコラボレーションが創り出した建築であり、また現代数寄屋を志向する設計者のこれまでの集大成として理解し、その緻密な空間構成を高く評価した。しかし、表層的な仕上げ材等にその志向が集約しすぎ、その拘りが建築空間の豊かさをむしろ低減させていることが心残りであった。しかし北海道建築のひとつの方向性を強く求める空間構成手法を高く評価し、その継続的な展開と普遍化への努力を期待し、『素材・尺度・光の変化による群としての空間設計手法』として審査員特別賞として授賞の対象とした。

「北海道立北方建築総合研究所」は、基本計画の段階から、これまでの旧寒地建築研究所が蓄積された室内環境計画理論や新しい環境制御技法が随所に組み込まれ、果敢な建築化も試みられている。しかし本来重視されるべき研究環境（物理的環境ではなく社会的環境）への配慮には疑問も生じ、また本来は具体的なアクティビティを前提とすべき中央部のアトリウムも、環境計画上の合理性の説明はあったが、建築計画的な合理性、空間構成上の合理性とはミスマッチであり、総合的にバランスの取れた建築とは評価することが出来ず、また過大なアトリウムの活用のあるが故に求められる建築の総合的な合理性と質の水準設定への大きな疑問が審査員の中に残っている。

「日藤メモリアルガーデン」は大正初期の軟石倉庫の改修・再生計画・設計である。特に美術館併設店舗の計画設計は簡素な構成と原型の持つ構造美を極力生かそうとした手法は評価でき、外部空間の構成もヒューマンな町並み要素として再生されている。しかし、物販店舗・事務所棟では残念ながらこの手法を適用できず、歴史的建造物の再生・改修の水準から見ると評価できない。

かった。町並み再生を前提としたときには、2棟の改修計画設計と外構再構成のシナジャイズが不可欠であると判断し、審査の対象からはずした。

北海道建築賞の選考基準が、「建築理論や設計・デザイン」に対し、「これからの北海道建築の地平を示唆しうる社会性と規範性」、「新しい挑戦・問題意識」加えて新たな人間・生活・環境の構築への意欲とビジョンに対する「合理と論理、ラディカル、そして洗練への努力」であることを再確認し、今年度は、北海道建築賞（本賞）は該当なしであることを確認して、本年度の建築賞審査委員会を解散した。

（文責：小林 英嗣）

（４）審査講評

北海道建築奨励賞 「北海道工業大学新講義棟G」

この建物は札幌市にある工科系私立大学の講義棟である。歴史のある大学だけに、キャンパスには既に多くの建築群が配されている。近年の学科再編に伴い新しい教室を創る必要が生じ、大学は施設のエンドユーザーともなる同大建築工学科・佐藤孝教授を中心とする設計チームを編成、建物のプランニングとデザインを担わせた。

計画にあたりいくつかの建設地が候補になったと聞くと、設計者は敢えて既存の図書館と学生食堂（HITプラザ）の間にあった1000台を収容する駐車場を敷地に選んだ。この選択がその後の計画における可能性と、ある種の困難さをもたらしたことは想像に難くない。即ち、個性的な形態とボリュームをもつ図書館と食堂（いずれも設計は圓山彬雄氏）の間に、どのような形態にせよ新たな建物を配置した場合、既存の建物との間に否応なく空間的な関係が生じ、固有の性格をもつ外部空間が出現する。設計の過程では、対象となる建物の内部空間を創りつつ、二つの外部空間の質を同時に吟味しなくてはならなかった。しかし、パズルを解くようなこの課題に対し、作者は見事な解答を見出した。相対する教室ブロックの狭間に6度の平面的な傾きをもつ全階吹き抜けのアトリウムを抱き込ませることで、建物東側では対面する図書館に平行な壁が正門と主玄関を結ぶ並木道の軸線を強調する一方、西側では食堂の壁をアイストップとする適度に囲われた緑の庭を生み出すことができた。アスファルト路面を車が埋めていた従前の殺風景な景観と比較するだけでも、この配置計画の妥当性がうなずける。今後、道路境界のフェンスを撤去する計画が実現すれば、3つの建物と周辺のオープンスペースは地域の人々にも一層親しまれるものとなるだろう。

建物の内部も機能的で美しい。大小合わせて29の教室を収容する単純な機能の施設だが、均質な教室の集合がもたらす単調さを救っているのが中央にある4層吹き抜けのアトリウムである。わずかな開角をもつ楔形平面は、授業の合間の短い時間に教室間を移動する学生の「流量」に対応すべくごく自然に導入されたとのことだが、アトリウム幅員の差異は又、吹き抜けを横切るブリッジや壁沿いに直登する階段などと相俟って、無性格な教室から出てくる学生に、自分が今いる場所を直感的に認知させるための有効なサインにもなっている。

吹き抜け部に並ぶ丸柱、要所に配されたアルコーブやブリッジ、平滑な壁面にテクスチャーを与える木製ルーバーなど、大きなスケールをブレイクダウンさせるデザイン上の配慮があり、アトリウム頂部のハイサイドライトも効果的だ。

審査の過程で、アトリウムの架構や列柱が装飾的に過ぎるといった評価やアプローチ動線の扱い方を疑問視する意見もあったが、総体的に見れば、計画の的確さと空間の心地よいスケール感が強く印象に残る秀作である。

（文責：大矢 二郎）

北海道建築賞審査員特別賞 「素材・尺度・光の変化による群としての空間設計手法」

川と山を背にした朝里川温泉の一角に、旅館であることを示すサインも見当たらず、また表側に面して一切開口部も無く、それはまさに蔵が群れるようにして、ひっそりと寡黙に佇んでいる。その一見、おとなしくも人の到来を拒むかのような佇まいとアプローチとは、背後の川と山とを借景としつつ、内部に様々にかつ親密に空間を展開するための仕掛けであることにや

がて気づくだろう。

細かく分節された各棟が庭を囲い込むようにして全体が構成されたその内部は、例えば客室や食事室の全室の仕上げが各々異なっており、また地窓や足元の間接照明等によって全体の重心が低く抑えられているものの、尺度に巧妙な強弱がつけられていることなど、素材・尺度・光を多様に变化させることによって、外部とは対照的に一種饒舌ともいえるほどに表現がなされている。全体を非対称にずらしつつ展開する構成、低く抑えられた尺度、主に素材による空間の多様な変化など、ここに見られる建築的特徴は、そのまま数寄屋の美学に繋がるものではある。しかし例えば、廊下壁面に裏使いで張られた杉材、石のようにサンドブラストされたコンクリートブロック、染色されルーバーとして用いられたMDF材など、ローコストと工期短縮をにらんだ上での、素材の徹底した吟味と工法の選択等により、ここでは単なる洗練とは異なる空間的な密度と質を獲得することに成功しているように思われる。商業的空間としてのキッチンあるいは表層的な遊戯に陥る危険性を孕みながらも、その一步手前で踏み止まっているかに見えるのは、多くの素材と手数をを用いながらも、作者はそれらを徹底して吟味しコントロールすることにより、安易な意味へと収束することを回避しているからに他ならない。このように考えると、プログラムや構成論等をベースとする設計手法とは異なり、素材や尺度という具体的なものを疑い吟味することを出発点として空間全体を構築しようとする、スイスをはじめとする現代建築の新たな流れのひとつが、この和風旅館という建築においても微妙に透けて見えてくるかのようである。

北海道の建築が、一般的な北海道という文脈との関係において表現される傾向がないとはいえないがゆえに、この試みと姿勢がことさら新鮮なものとして映るともいえそうである。

(文責：山田 深)

5.2 卒業設計優秀作品(日本建築学会北海道支部賞)

(1) 受賞者

大学の部 (応募作品数 12 点)

- ・金賞 梅津 学 君： 北海道大学工学部建築都市学科
作品名 catalyst
- ・銀賞 熊切 真知子君： 北海学園大学工学部建築学科
作品名 Mesh
- ・銅賞 秋元 葵 君： 北海学園大学工学部建築学科
作品名 genome of life genome of urban
- ・銅賞 倉本 武樹 君： 北海道工業大学工学部建築工学科
作品名 鐵の残像～THE GENUINE HISTORICAL MUSEUM～

短大・高専・専門学校部 (応募作品数 7 点)

- ・金賞 中村 友里恵君： 札幌市立高等専門学校インダストリアルデザイン学科
作品名 海を臨むホスピス—A HOSPICE FACING THE SEA
- ・銀賞 道尾 淳子 君： 札幌市立高等専門学校インダストリアルデザイン専攻
作品名 クラス
現札幌市立大通小学校における都心型複集合住宅計画
- ・銀賞 向井 沙江 君： 釧路工業高等専門学校建築学科
作品名 C.H. Collective Housing

工業高校の部 (応募作品数 11 点)

- ・金賞 岡田 拓也君： 北海道札幌工業高等学校建築科
作品名 COMMUNICATION 図書館
人と人と自然の交流
- ・銀賞 松浦 喬君： 北海道美唄工業高等学校建築科

作品名 Community Circle
・話・和・輪・環・
・銅賞 夏坂 彩君 : 北海道名寄光凌高等学校建築システム科
作品名 郷 kyoh image +

(2) 卒業設計優秀作品審査委員会(主査:鳥海 良晴君 委員数6名 委員会開催数1回)
2002年度 道内大学・短大・高専・専門学校・工高卒業設計優秀作品の審査方針を協議し、
審査を実施した。また、討論により講評の論点を確認し、講評者の担当を決定した。

審査委員:井端 明男君、上遠野 克君、斎藤 徹君、鳥海 良晴君、中山 眞琴君、若杉 博
文君

(3) 審査講評

大学の部

金賞・梅津君:

三菱美唄鉄道跡地という人々の歴史と記憶が重なる場。そこに残されたプラットフォームの跡地、旧駅舎を手がかりに、新たな創造拠点を造ろうとしたミュージアム計画である。ブルーグレーの色調で統一されたプレゼンテーションが美しい。リニアなプラットフォーム跡地と相まったりリニアな建築物は、人々の記憶を過去から現在、未来へと繋いでゆくであろう。また、プログラムの説明から、建築空間化とその表現までの流れが、破綻なく美しいシークエンスで詩的に語られているのが見事であった。

(文責:鳥海 良晴)

銀賞・熊切君:

都市の中に効率という概念が居据わったために、いろいろな不都合が生まれ、都市を不毛なものに変化させてしまった。表通りには効率という名のビルが並び、その裏には貧相なアパート群が乱立する。その当たり前といえるヒエラルキーの中にほとんどの建物は埋没していく。スラム化が進み、更にその質を下げていく。住む人々は何の希望もなく、建築に興味をもたず、文化に触れる事もない。「メッシュ」はある意味でパラドックスであるが、実に重要な提案が秘められている。建築(物質体)と空気が一回クラッシュさせ、ぐちゃぐちゃにして、パッと放り出す。その散らばった状態がメッシュであり、そこには建築の保有する水平性、垂直性、連続性、露地性、ヒエラルキー、透明性、対峙性が全て盛り込まれる。金賞に値する力作である。

(文責:中山 眞琴)

銅賞・秋元君:

商と住の混在による不均質な多様性を、限定した素材・テラス・木製ルーバー等のポキャブラリーを使いながら、地域再生のプログラムとした作品。ディテールに建築的なおもしろさが見え隠れしている。居住空間の垂直方向だけではなくトポロジカルな重層性と、木製ルーバーの多様性が表現できたら、中層高密度のアジアの魅力が一層増したと思います。

(文責:上遠野 克)

銅賞・倉本君:

当初は選外であったが、読み込んでいくにつれてその魅力にはまってしまった。その表現力、センス、文章力、何をとっても一級品である。その解りづらさが銅賞にはなったが、私個人としては金賞以上のものをあげたいくらいであった。「巷に出回る歴史館の方法は無効である」何と小気味いい表現ではないか。

私も常にそう感じている一人として、エールを送りたい。

建築図面としての表現がなされていないのではないかと、という審査員もいたがそれは間違っている。建築図面は伝達ツールである。であれば、今までの方法こそ必ずしも有効とならない。

審査員ももっと時代の流れや、目的を見失わないようにしなければならないのではないか。そういう意味では問題を投げかけた作品である。

(文責：中山 眞琴)

短大・高専・専門学校の部

金賞・中村君：

石狩湾を望む銭函の高台に、限られた残りの人生を快適に過ごすための提案である。実にゆったりと伸び伸びした空間計画で、従来の狭隘な事例にとらわれていないところが評価できる。全体にスペースが十分で、居室には使い慣れたイス、備品、飾り物や写真など、慣れ親しんだ自宅の雰囲気と一緒に持ち込めるゆとりがある。ベッドとともに外に出られる海側のテラスと、南面の日当たりを受ける中庭を配し、時間と季節を感じながら過ごす空間の落ち着きを感じられる。

(文責：斉藤 徹)

銀賞・道尾君：

学校跡地再生の集住プロジェクトである。矩形街区に斜めに設定した板状の構造システムの中に、光、緑、風が意識されるスリットを導入し、多様なライフステージの暮らしを積極的に提案している。住環境におけるアクティビティ向上のための既存施設の再活用や集住することによるゆとり創出に少し工夫が必要であったか。今後に期待します。

(文責：渡邊 広明)

銀賞・向井君：

曲面の面白い形態から詩的な印象を受けるが、多様な居住者がともに暮らす計画意図が評価できるコレクティブハウジングである。家族タイプ、独身者タイプ、高齢者タイプの住タイプを中庭型で混在させながら、多世代の交流のための共有スペースを通じて、コミュニティ形成と連帯感の醸成を意識している。中庭の広場を通り抜ける道で低層の3棟をつなぐ空間構成に、柔らかな変化のシークエンスのねらいも感じられる。

(文責：斉藤 徹)

工業高校の部

金賞・岡田君：

コミュニケーションを主題にした図書館を、シンメトリックな配置と円型を主体にした4つの建築群で構成した力作。アプローチの長さ、途中の庭等、又内部空間から感じられる重層化した外部空間など、多くの建築的魅力を感じる作品です。周辺環境との関わり方に対する視点があったらより良い作品になったと思います。

(文責：上遠野 克)

銀賞・松浦君：

中央の屋外ステージを取り囲むように、図書館、公民館、体育館がサークル状に配置された公園内のユニークなコミュニティー施設である。大きなボリュームの集合体になりがちだが、屋根の架け方が良く考えられ、周囲に対する威圧感を最小限に抑えている。プレゼンテーションもていねいに彩色されて、人に伝えようという努力が見られ好感がもてる作品である。

(文責：鳥海 良晴)

銅賞・夏坂君：

自分の住む町への思いから構想は始まる。町に足りないものは、何だろう・・・！人が集まり使いやすいホール機能、郷土のデザイン・明るいイメージ、シンボル性や環境との協調性・・・。11枚の紙面いっぱいに表示している。建築は周囲の環境との関係でその魅力を高めます。建築に取組む視野の拡大に期待します。

(文責：渡邊 広明)

5.3 優秀学生・生徒(日本建築学会北海道支部賞)

2002 年度道内大学・短大・高専・工高優秀学生・生徒として以下の学生・生徒を表彰した。

菊田 弘輝君・畑 奈緒未君：北海道大学工学部建築都市学科
沢口 幸洋君・穴吹 拓也君：北海学園大学工学部建築学科
深石奈津子君・村澤 和也君：北海道工業大学建築工学科
池田 隼人君・古藤 里美君：室蘭工業大学建設システム工学科
宮原 剛君・白瀬 洋子君：北海道東海大学芸術工学部建築学科
宿院 和裕君・笈田 沙織君：道都大学美術学部建築学科
向井 沙江君・杉山 千晶君：釧路工業高等専門学校建築学科
打矢 繭生君：札幌市立高等専門学校専攻科インダストリアルデザイン専攻
福田 菜々君：札幌市立高等専門学校インダストリアルデザイン学科
佐々木裕志君：北海道職業能力開発大学校建築技術システム技術科
伊藤 史恵君：北海道職業能力開発大学校建築科
中村 元君：北海道立正学園旭川実業高等学校建築科
武田 行由君：北海道札幌工業高等学校建築科
佐藤竜太郎君：北海道札幌工業高等学校定時制建築科
加賀 智君：北海道小樽工業高等学校建築科
右近 翔太君：北海道小樽工業高等学校定時制建築科
稲田 理沙君：北海道函館工業高等学校建築科
松田 浩平君：北海道函館工業高等学校定時制建築科
山富 美奈君：北海道旭川工業高等学校建築科
佐藤 美幸君：北海道旭川工業高等学校定時制建築科
茅森 紗代君：北海道苫小牧工業高等学校建築科
鈴木 貴裕君：北海道苫小牧工業高等学校定時制建築科
郷 明日香君：北海道帯広工業高等学校建築科
田代 博君：北海道釧路工業高等学校建築科
谷 直樹君：北海道名寄光凌高等学校建築システム科
松浦 喬君：北海道美唄工業高等学校建築科
藤川 猛志君：北海道室蘭工業高等学校建築科
小山内一寛君：北海道留萌千望高等学校建築科
加賀屋洋介君：北海道北見工業高等学校建築科

6．建築作品発表会の実施

(1) 建築作品発表会委員会 (主査：小篠 隆生君 委員 4 名 実行委員 11 名 委員会開催数 6 回 実行委員会 2 回含む)

本年は、発表形式の改善をテーマとし活動した。まず発表登録の変更で、学会支部 HP とメールでの登録を可能にした。さらに、発表形式の変更である。発表会での議論をより深める仕掛けとして、発表を 2 段階制にし、委員会が判断した作品に対して追加発表を要請し、その作品を主体に議論を展開する。限られた時間の使い方、その中での内容、質の向上をめざした。

その後、8 名の実行委員を加えて、実行委員会は 4 回開催した。委員会の方針を具現化するため、作品全体をナレーションで紹介し、12 作品について追加発表を決定した。さらに、PowerPoint 等による PC を使った発表も可能とした。

11 月 1 日に第 22 回建築作品発表会を北海道立近代美術館講堂で開催、作品集 VOL.22 を発刊した。その後発表会の活動について北海道建築士事務所協会誌「ひろば」12 月号に米田浩志君、また日本建築学会誌「建築雑誌」2003 年 1 月号に山田深君の論評を掲載した。

(2) 建築作品発表会の開催

第22回建築作品発表会 ARCHITECTURAL FORUM IN SAPPORO

期日 2002年11月1日

会場 北海道立近代美術館講堂

発表作品数 33題

本年より発表形式は、ナレーションによる全作品の紹介、次いで議論を深めるために実行委員会で選出した12作品の追加プレゼンテーションと討論という形で行った。今回は、昨年、一昨年といった道外建築家からの大作はなかったが、道内の30~40歳代の作品群が多かったのが特徴である。また、それらが今までの北海道建築の文脈とは一線を画す建築の解き方を目指していることが伺え、発表会の中での議論も建築の解き方の可能性について様々な議論がなされた。

参加者約500名。「北海道建築作品発表会作品集2002 VOL.22」を発刊。

7. 特別委員会の活動

7.1 事業主査連絡会（事業系5委員会の主査、活性化委員会事業企画部会担当常議員 連絡会開催数1回）

活性化委員会事業企画部会との連携を図るため、合同会議を開催し、事業系各委員会の活動経過・予算執行状況報告、次年度活動計画・予算案について情報交換を行った。また、2001年度に提起された諸課題について更に具体的な議論がなされ、支部活動と支部財政は密接な関係にあり、会員減少傾向のもとでの今後の方向性について、学術委員会を含めた全般のあり方や実施責任の明確化等に関し、支部として再考する時期ではないかとの認識が示された。

7.2 総務委員会（主査：後藤 康明君 委員数5名 委員会開催数2回 <他に、合同企画委員会6回、合同運営委員会3回>）

北海道支部の毎月の収入・支出内容についての確認、経理執行状況と予算との比較検討、全体の財務管理について主に検討を行い、常議員会で報告を行った。また、次年度の予算案策定について検討した。日本建築家協会北海道支部と合同事務所の環境に関する事項について合同運営委員会で協議し、事務所環境として改善すべき点をまとめて要望書としてビル管理会社に提出した。昨年に引き続き合同企画委員会において、建築関連の情報交換を行うとともに、合同企画についての検討も行い、ジョイントセミナー（3回：6/25, 8/26, 11/6）、見学会（北総研：11/6）を実施した。

7.3 活性化委員会

2001年度に「支部活性化委員会」が、支部長を委員長とし全常議員を委員とする構成で常議員会に設置され、支部活動を活性化させるための検討を行ってきている。また、この委員会は「事業企画部会」及び「会員サービス部会」で構成されている。

（1）事業企画部会

・構成員：瀬戸口剛君、中岡正憲君、羽深久夫君、山田深君、那須豊治君、佐藤孝君、小林孝二君

・事業の企画など支部活動のあり方、総会の活性化等を検討するため、事業主査連絡会と合同会議を開催し、厳しい財政状況下での活動全般見直し論が提起された。

・担当委員会

事業主査連絡会（建築作品発表会、北海道建築賞、作品選集支部選考部会、支部共通事業設計競技審査委員会、卒業設計優秀作品審査委員会）

総務委員会

（2）会員サービス部会

・構成員：門谷眞一郎君、小林清繁君、佐藤哲身君、奈良謙伸君、斉藤徹君、鈴木康志君、長谷川雅浩君

- ・ 2001 年度検討された改善策の実施移行を図った。
- ・ 会員状況把握と会員勧誘活動
- ・ 要望対応、情報提供、地区員との連携などの検討
- ・ 担当委員会
 - 学術委員会（専門委員会、特定課題、本部助成、文化関連事業）
 - 研究発表会
 - ホームページ管理委員会

7.4 ホームページ管理委員会（主査：長谷川 雅浩君 委員数 2 名）

本委員会は 2001 年 4 月に開設された当支部のホームページを管理することを目的としている。2002 年度は約 5400 件のアクセスがあり支部活動の広報に貢献した。講習会、シンポジウム、講演会等の案内を 26 件掲載、支部研究報告会の申込み関係書類の HP からのダウンロードなどを行った。

7.5 能力開発支援制度の試行運用

今日、「国際的に通用する高い専門能力を有する技術者の養成」という社会的要請のもとで、高等専門教育終了後の「研究者・技術者の継続的な能力開発」に日本建築学会として如何に貢献すべきかについて本部に特別調査委員会を設けて検討を重ね、「日本建築学会能力開発支援制度」を創設し、2004 年 4 月 1 日の本格運用を目指し、2003 年 4 月 1 日から試行運用することとなった。（建築雑誌 2002 年 12 月号、2003 年 1・2・3 月号参照）

このことに関して、2003 年 1 月 21 日、3 月 14 日に本部において支部事務局会議が開催され、登録方法・処理実務等に関して説明がなされた。

7.6 大会実行委員会設立準備委員会（委員長：城 攻君 委員数 8 名 委員会開催数 4 回）

2004 年度大会（北海道）の大会委員長に石山祐二支部長、実行委員長に城攻北大教授を推薦した。また、大会企画・運営の相当部分を委託するトラベル・エージェンシーを選定した。

8 . 講習会・シンポジウム等の開催

8 . 1 (1) 本部主催講習会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
シックハウス防止のための住まいづくり講習会	2002.12.9	北海道大学学术交流 会館	坊垣和明君 他5名	65名
JASS5 鉄筋コンクリート工事改定 JASS10 プレキャスト鉄筋コン クリート工事改定講習会	2003.2.18	ホテルノースシテイ	阿部道彦君 他3名	76名

8 . 1 (2) 支部委員会主催講習会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
寒中コンクリート施工支援シ テム講習会(材料施工専門委員 会)	2002.9.26	北海道大学学术交流 会館	浜 幸雄君 他3名	131名

8 . 2 (1) 本部主催講演会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
2002年度日本建築学会賞(作品) 受賞記念講演会「作品を語る」	2002.7.5	アーバンホール	渡辺 明君 他3名	250名

8 . 2 (2) 支部主催講演会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
「地球環境と環境建築」	2002.6.21	かでの 2.7	仙田 満君	約200名
「建築構造材料の歴史 木・石・ れんが・鉄・コンクリート」	2002.10.30	北海道小樽工業高等 学校	水野信太郎君	80名
「新しい建築技術」	2002.10.30	北海道札幌工業高等 学校	那須豊治君	80名
「建築家アントニオガウディと サグラダファミリア贖罪聖堂の 建築について」	2002.10.30	北海道苫小牧工業高 等学校	中渡憲彦君	120名
「氷で造るドーム」	2002.11.1.	北海道室蘭工業高等 学校	粉川 牧君	65名
第22回建築作品発表会	2002.11.1	北海道立近代美術館	作品数33点	約500名

8 . 2 (3) 支部委員会主催講演会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
Jack Moehle 教授特別講演会 (構造専門委員会)	2002.5.16	KKR ホテル札幌	Jack Moehle 君	100名
つながりが生まれる公園づくり (北方系住宅専門委員会)	2002.10.26	滝川市文化センター	荒谷 登君 他8名	60名
北海道におけるコンパクトシ ティとまちなか居住の可能性 (都市計画専門委員会)	2003.1.17	かでの 2.7	中出 文平君	68名

8.3 展示会

開催日	名 称	会 場	参加者数
02.5.17.~ 5.28	2001年度道内大学・短大・高専・専門学校・ 工高卒業設計優秀作品展示会	インテリアセンター	約100名
02.5.17~19 6.1~3 6.8~10 11.12~16	全国大学・高専卒業設計展示会	北海道東海大学 室蘭工業大学 北海道大学 釧路工業高等専門学校	187名 350名 120名 200名
02.6.22~ 7.7	「素材とかたちを科学する=建築とE・ト ロハ展」札幌展	札幌青少年科学館	延べ2060名
02.6.24~ 12.13	道内工高卒業設計優秀作品巡回展	道内工高13校	

8.4 見学会

開催日	見 学 場 所	解説者	参加者数	主 催
2002.10.6	「建築散歩～毛綱毅曠の建築を巡る (釧路編)」	駒木定正君	53名	歴史意匠専門委員会

9. 本部関連事業・その他

9.1 2002年度支部共通事業設計競技の実施

(1) 共通事業設計競技審査委員会(主査:豊嶋 守君 委員数5名 委員会開催数1回)

2002年度の支部共通事業設計競技審査委員会の支部審査委員は、染谷哲行、平尾稔幸、八代克彦、山田 深、豊嶋 守の5名で構成し、開催数は1回であった。

委員会は7月5日、委員全員出席で北海道支部事務所会議室において午後4時より開催した。本年の設計競技課題は「外国人と暮らすまち」であり、道内からの3点の作品であった。全作品に共通しての印象は、CADを駆使した表現が多くなり、美しく精密な表現ではあるが、主題をどう語っているかが審査側にはなかなか見えてこない傾向が感じられた。審査は前半各委員が作品3点を1時間かけて審査し、後半は活発な意見交換の後に再び各々が厳正な審査の上投票した。その結果、皆川案を支部入選と決定した。

(文責:豊嶋 守)

支部審査委員: 染谷 哲行君、豊嶋 守君、平尾 稔幸君、八代 克彦君、山田 深君

(2) 2002年度支部共通事業設計競技

日本建築学会設計競技課題 「外国人と暮らすまち」

応募点数 3点

・支部入選作品 1点

皆川雄一君(北海道大学大学院工学研究科)

(3) 審査講評

道内から3点の応募があった。

清水案は、旧拓銀本店をリニューアルし、住居と実験場とするものである。駅前通りと大通りの交点であること、歴史的な建物であること、オフィスビルが住まいに変わることなどに時空の重ねが評価できる。スケルトンのみ残した新たな状況の設定も良い。しかし、1枚目のプレゼンが弱いこと、建築内部の機能設定がやや強引なところが惜しまれる。

植松案「BRAIN NATION」は、小さな活動体の集合としてのまちを表現している。札幌の光星地区に2ブロック程度の建築空間を想定し、箱とボリュームと文化を混成させようとする力作であるが、もう少し様々な魅力的な活動を想像させるプレゼンが望まれた。

皆川案「+ Platform」は界川緑地という場所を用いて、ボーダーレスのゆるやかなコミュニティと流動的な空間による中間的密度を提案している。建築的提案には個性がなく、2枚目のプレゼンの意味が弱い。しかしながら、ありうべき具体的な場所をきちんと設定し、外国人という言葉を含めず、ボーダーレスコミュニティの可能性を示したことが大いに評価できる。

(文責：平尾 稔幸)

9.2 作品選集支部選考の実施

(1) 作品選集支部選考部会活動報告

2002年度の支部選考部会構成委員数は9名。部会の開催回数は2回。本年度に北海道支部へ応募された作品数は8点で、昨年の約5割に激減した。しかし全国集計では応募総数が251点と、昨年の2.5割増しとなった。本部委員会では、作品選集掲載数は昨年同様に100題以内とし、各支部の推薦作品数は例年通りの計算で北海道支部は、Aランク1点を含んで4点となった。これを受けて、支部の部会では、応募の全作品を複数委員によって現地視察を行ない、本部への推薦作品の絞り込みを行った。選考方法は、提出された8作品に対して、4作品を各自選定し投票を行い、投票数0は選外とした。次に、1点でも投票された作品は、選者の応援演説をもらい第2回投票へすすめるかどうかを協議した。それをくり返して4作品に絞り込んだ。絞り込まれた4作品の中からAランク1点を投票し決定した。

主査：大野 仰一君 委員：金沢 俊邦君、近藤 清隆君、豊嶋 守君、鳥谷部隆司君、西牟田章夫君、平尾 稔幸君、松橋 常世君、山田 深君

(2) 作品選集支部選考の結果

本部委員会にて、各支部から推薦となった全作品の応募時提出ファイルを全ての委員が閲覧し、作品の応援演説を交えた議論の末、投票を繰り返しながら絞り込んだ。結果として、北海道支部からは以下の3作品の作品選集掲載が決定した。

札幌ドーム

原 広司君：(株)原 広司 + アトリエ・ファイ建築研究所

奥尻島津波館

後藤達也君：(株)アトリエブク

北海道工業大学新講義棟

佐藤 孝君：北海道工業大学建築学科

大垣直明君：北海道工業大学環境デザイン学科

湯山康樹君：清水建設株式会社

鈴木健夫君：清水建設株式会社

9.3 建築文化週間

(1) 見学会「建築散歩～毛綱毅曠の建築を巡る(釧路編)」(責任者：西澤岳夫君)

主催：北海道支部歴史意匠専門委員会

日時：10月6日(日)10:00～16:00

国内外で高い評価を得ていた釧路出身の建築家毛綱毅曠氏が一昨年9月に逝去された。これまで当委員会では歴史的建造物の見学会を「建築散歩」として毎年企画してきたが、本年度は同氏が郷里釧路に残した一連の建築作品を市民の方々と訪ね歩く機会を持つこととした。今回は地元新聞のPR、一昨年開催の毛綱毅曠展やシンポジウムに対する反響も手伝って、定員55名のとこ

る75名の応募があり、抽選を行うこととなった(当日参加者は2名欠席の計53名)。

見学会は釧路市立博物館講堂での「みどころ解説」に始まり、順次、釧路市立博物館、釧路市立東中学校、釧路湖陵高等学校同窓会ギャラリー、ふくしま医院、釧路フィッシャーマンズワープ・MOO、釧路市湿原展望資料館へと移動した。移動は貸し切りバスで行ない、移動中は参加者との談話の時間にあてた。講堂での解説には故毛綱氏と同郷の駒木定正委員(北海道職業能力開発大学校)がこれにあたり、毛綱氏自身がかつて連載した新聞記事を引き合いに分かりやすい解説を加えた。今回は一般開放していない学校建築を見学できたうえ、ふくしま医院では医院長みずから入れてくれた暖かい飲み物を片手に医院新築にまつわるエピソードを聞く事ができるという幸運にも恵まれた。

今回の見学会を通して、参加者の中から「毛綱建築のエネルギーに触れることができた」「未来へ伝えるべき釧路の誇れる共有財産を実感することができた」「また同じような見学会をしてほしい」との感想があった。移動を含め6時間程の長時間ではあったが、有意義な見学会として終えることができた。

なお、見学会に当たって協力いただいた釧路市教育委員会、同市立博物館、見学の場を提供いただいた関係者の方々に記して感謝申し上げます。

(2) シンポジウム「つながりが生まれる公園づくり」(責任者：長谷川寿夫君)

<主催> 日本建築学会北海道支部北方系住宅専門委員会

<後援> 滝川市、(社)北海道建築士会空知支部滝川分会

日 時 10月26日(土) 13:30 ~ 16:30

会 場 滝川市文化センター 3階 小ホール

(滝川市新町3丁目6番4号)

内容

- | | | |
|---------------------------------|--|--------|
| 1) 共有の富としての公園 | 北海道大学名誉教授 | 荒谷 登君 |
| 2) 公園づくり事例紹介 | | |
| 1. 札幌・藤野「やさしさ、ふれあい、心の輪」 | | |
| | 札幌市南区土木部維持管理課 | 新谷 克教君 |
| | むくどりホーム・ふれあいの会代表 | 柴川 明子君 |
| 2. 美唄・滝川の公園づくり | 「彫刻による空間・公園づくり」 | |
| | 北海道建築士会空知支部青年部長 | 松本 和弘君 |
| | 同 滝川分会青年部副部長 | 小松 幹宜君 |
| 3) パネルディスカッション「つながりが生まれる公園のために」 | | |
| コーディネーター | 北海道文教大学教授 | 鎌田 清子君 |
| パネラー | 荒谷 登君、新谷克教君、柴川明子君、
小池禎一君(滝川市建設部建設課公園係長)
伊藤和博君(北海道建築士会空知支部滝川分会)
櫻井亮一君((有)プラッツ) | |

配布資料 1. シンポジウム要旨集

2. 「雪休日の楽しみ」(日本建築学会北海道支部北方系住宅専門委員会編)

参加者 60名

10. 建築関連団体との活動

10.1 AIJ-JIA 合同委員会(運営委員会8名 3回 企画委員会13名 6回)

運営委員会では合同事務所の運営に関わる諸事項について話し合いを行った。特に、事務所の環境についての協議を行い、10月29日に管理事務所に対して改善要望提案書を提出した。企画委員会では合同企画として、北方建築総合研究所の見学会(11/6)、建築セミナー(ジョイントセミナーA&J)(3回)を実行した。昨年からの協議を行ったアールト展(4月)やトロハ展(6月)の関連企画の実施に協力を行った。さらに、道内建築関連団体の行事スケジュールをまとめ、北海道建築指

導センターの URL に掲載し、互いの協力体制を協議した。
(<http://www.hokkaido-ksc.or.jp/dantai/k-gatusibu.htm>)

10.2 北海道建築設計会議

「北海道において建築設計に関係する団体が、地域性を踏まえた豊かな建築・都市を市民・消費者とともに考え、創り出して行くため、相互に連携した活動に取り組もうではないか」との呼びかけに対し、建築学会北海道支部として賛同するものであることから、常議員の佐藤孝君と中岡正憲君の2名を設立準備会に参加させた。

2003年3月7日、(社)日本建築学会北海道支部、(社)日本建築家協会北海道支部、(社)北海道建築士会、(社)北海道建築士事務所協会、(社)北海道まちづくり促進協会の5団体が設立合意し、共同宣言を行った。

今後、各団体の事業などの連携や共同企画について具体的な検討を行い活動することとしている。

11. 共催・後援（2002年度内に申請のあったもの）

期 日	名 称	会 場	主 催
共催 2003.3.13	「地球・環境・建築・人間 自然からちょうだいする」	北海道立北方建築総合研究所	北海道立北方建築総合研究所
後援 2002.7.12 ～7.14	ガウディ生誕150年記念 「BRICKJAM 2002」（ガウディへの 憧憬）	江別市・岡田倉庫	ガウディクラブ文化 会館、ガウディメモ リアル実行委員会
2002.5.19	シックハウス症候群と化学物質過 敏症の問題	札幌市医師会館	北海道アトピー環境 研究会
2002.6.3	第27回「北の住まい」住宅設計コ ンペ		(社)北海道建築士事 務所協会
2002.6.11	JIAノーザイセミナー2002	アーバンホール	(社)日本建築家協会 北海道支部
2002.6.28	北海道の豊かなルーラル・ライフ の創出	かでの2.7	NPO法人日本都市計画 家協会北海道支部
2002.7.1	素材を中心とした空間の骨格と構 造デザイン	北海道工業大学	北海道工業大学・ト ロ八展実行委員会
2002.11.9	建築家三沢浩「モダニズム建築の 20世紀」	かでの2.7	(社)北海道建築士札 幌支部 新建築家技術者集団 北海道支部
2002.11.6	第13回旭川建築作品発表会	リハーサルホール	旭川まちなみ推進委 員会
2002.12.6	JIA建築セミナー2002	アーバンホール	(社)日本建築家協会 北海道支部
2002.12.17 ～ 12.23	見た・測った・描いた ～北海道大学建築意匠学研究室実 測展～	札幌資料館ギャラリー	北海道大学建築史意 匠学研究室
2003.2.27	第290回コンクリートセミナー	ホテルポールスター札幌	(社)セメント協会
2002.3.4 ～3.13	「建築士のための指定講習会」	北海道中小企業会館 函館勤労総合福祉センター サントライ北見 旭川市ときわ市民ホール 帯広市役所	(社)北海道建築士会
2003.3.28	モエレ沼公園にイサム・ノグチが 託した夢	ホテルニューオータニ札幌	イサム・ノグチメモ リアル「モエレ沼公 園」の活用を考える

2002 年度財産目録および収支決算報告

2002 年度 財産目録

資産の部					資金および負債の部					
摘 要		前年度末	本年度末	比 較	摘 要		前年度末	本年度末	比 較	
基本財産					資	支部基金	7,410,000	3,010,000	-4,400,000	
						学術振興基金	0	4,020,000	4,020,000	
						災害調査	2,000,000	2,000,000	0	
						退職金積立金	0	60,000	60,000	
	計	0	0	0						
運用財産	現金	85,984	165,937	79,953	金					
	預金	662,700	719,992	57,292						
	普通預金	662,700	719,992	57,292						
	未収金	0	0	0						
	仮払金	525,503	506,200	-19,303						
	計	1,274,187	1,392,129	117,942		計	9,410,000	9,090,000	-320,000	
引当財産	基金引当預金	7,410,000	3,010,000	-4,400,000	負	未払金	0	0	0	
	信託預金	7,410,000	0	-7,410,000			仮受金	478,450	494,744	16,294
	定期預金	0	3,010,000	3,010,000						
	学術振興基金引当預金	0	4,020,000	4,020,000						
	定期預金	0	4,020,000	4,020,000						
	災害調査預金	2,000,000	2,000,000	0						
	普通預金	2,000,000	2,000,000	0						
	職員退職引当預金	0	60,000	60,000		計	478,450	494,744	16,294	
	定期預金	0	60,000	60,000						
		計	9,410,000	9,090,000	-320,000	繰	前期繰越金	0	0	0
					越	当期過不足金	795,737	897,385	101,648	
					金	計	795,737	897,385	101,648	
	合 計	10,684,187	10,482,129	-202,058		合 計	10,684,187	10,482,129	-202,058	

2002年度 収支決算書


収入の部				支出の部					
摘要	予算額	決算額	増減	摘要	予算額	決算額	増減		
交付金	支部費	1,553,000	1,619,000	66,000	事業費	調査研究事業費	950,000	792,000	-158,000
	経営助成金	2,850,000	2,760,000	-90,000		表彰関係費	750,000	781,969	31,969
	事業交付金	1,040,000	1,026,000	-14,000		設計競技費	40,000	6,999	-33,001
	支部事務所費	1,589,000	1,589,000	0		卒業設計展示費	40,000	34,861	-5,139
	支部事務費	300,000	300,000	0		教育文化事業費	700,000	700,766	766
				ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾞﾑ等経費	2,800,000	3,680,803	880,803		
				委託調査研究費	0	2,125,000	2,125,000		
計	7,332,000	7,294,000	-38,000	計	5,280,000	8,122,398	2,842,398		
副次収入	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾞﾑ等収入	2,400,000	3,321,410	921,410	特別事業費	記念事業費	0	0	0
	調査研究受託収入	0	2,500,000	2,500,000		計	0	0	0
	雑収入	600,000	820,140	220,140	会議費	総会費	160,000	226,332	66,332
	収入利息	10,000	4,603	-5,397		役員会費	70,000	60,000	-10,000
				0		運営費	50,000	167,227	117,227
計	3,010,000	6,646,153	3,636,153	計	280,000	453,559	173,559		
前期繰越金	795,737	795,737	0	事務費	人件費	2,040,000	2,336,454	296,454	
基金取崩金	4,400,000	4,780,000	380,000		通信費	300,000	303,191	3,191	
					印刷費	50,000	8,400	-41,600	
					消耗品費	150,000	134,219	-15,781	
					雑費	580,000	631,435	51,435	
				事務所費	2,270,000	2,228,849	-41,151		
				計	5,390,000	5,642,548	252,548		
				基金積立金	4,000,000	4,400,000	400,000		
				予備金	587,737	0	-587,737		
小計	15,537,737	19,515,890	3,978,153	小計	15,537,737	18,618,505	3,080,768		
資産収入				資産支出					
合計	15,537,737	19,515,890	3,978,153	合計	15,537,737	18,618,505	3,080,768		
収支差額				収支差額		897,385			

監査報告

2002年度における社団法人日本建築学会北海道支部の業務および経理を監査の結果、業務は適法であり、収入支出とも適正なものと認める。

2003年5月1日

支部監事

井野 智 

支部監事

粉川 牧 

2003 年度事業計画方針案

1. 活動方針

建築界を取り巻く諸情勢は、残念ながら依然として厳しい情勢が続いている。その影響もあり、全国的な傾向でもあるが、支部の個人・法人会員も減少してきている。

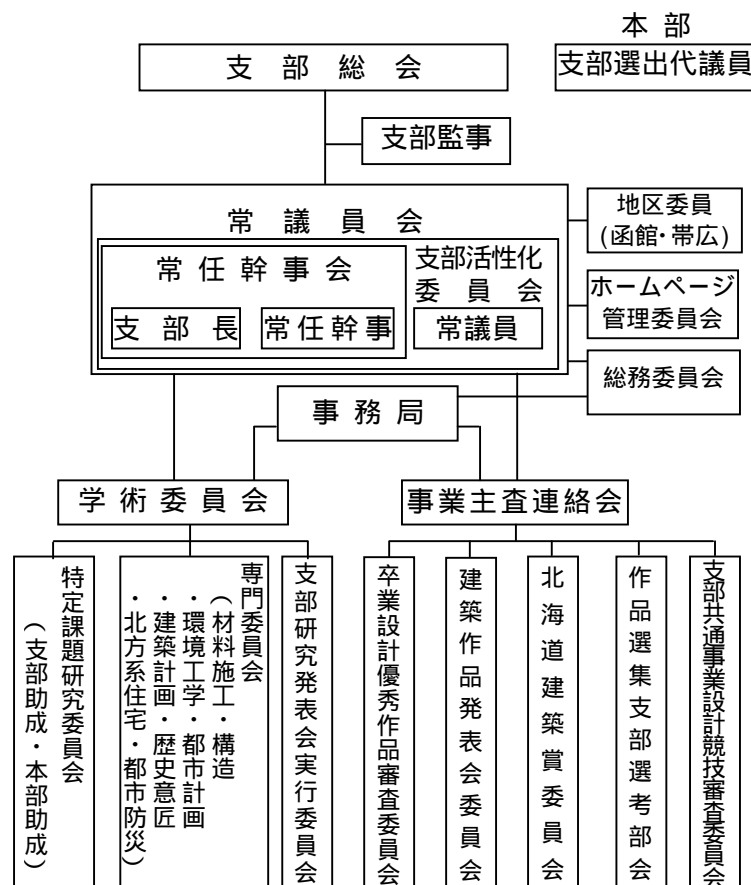
このような現状に対応するため、本年度においては、これまで以上に活動成果の社会的還元や会員サービスの充実を図るとともに、効率的な財政運営に努める必要がある。

このため、引き続き支部事務所を有効活用するほか、ホームページの充実などにより、会員への迅速かつ確かな情報提供を進める。

また、来年度には、日本建築学会大会が北海道で開催される予定となっており、大会に向けて、今年度から、実行委員会を中心に、鋭意、準備を進める必要がある。近年、大会は学術発表の場としてばかりではなく、市民向けの行事を複数の地方都市で開催するなど、社会貢献を意識したものとなっている。

このような傾向からも、色々な立場の会員が積極的に参加することが望まれ、通常の活動と併せて、「社会に開かれた学会」を目指すこととする。

2. 2003 年度執行体制



日本建築学会北海道支部組織構成図

支部長(2002.6.1-2004.5.31)

石山 祐二君

北海道大学大学院工学研究科教授

新任常議員(2003.6.1~2005.5.31)

石塚 弘君	北海道建設部住宅課課長補佐
小幡 圭二君	北海道札幌工業高等学校設備科科长
菊地 優君	北海道大学大学院工学研究科助教授
中原 宏君	札幌市立高等専門学校教授
藤島 喬君	T A U設計工房代表取締役
向山 松秀君	石本建築事務所札幌支所副支所長
山之内裕一君	山之内建築研究所代表

支部長及び新任常議員は、支部役員選挙開票(2003年4月15日)により決定した。
支部役員選挙管理委員は次の通りであった。(印 委員長)

後藤 康明君 斉藤 徹君 佐藤 哲身君 那須 豊治君 横山 隆君

留任常議員(2002.6.1~2004.5.31)

小林 孝二君	北海道開拓記念館学芸部学芸第二課長
斉藤 徹君	ドーコン技術情報部事業開発室技師長
佐藤 孝君	北海道工業大学建築工学科教授
佐藤 哲身君	北海学園大学工学部建築学科教授
鈴木 康志君	大成建設札幌支店建築部長
那須 豊治君	岩田建設技術開発室長
長谷川雅浩君	北海道立北方建築総合研究所居住科学部住生活科長

(印 常任幹事)

新任代議員(2003.4.1~2005.3.31)

伊藤 茂樹君	北海道立紋別南高等学校校長
絵内 正道君	北海道大学教授
野田 恒君	伊藤組土建技術部長

(2003年3月の本部選挙の結果、上記3名が選出された)

留任代議員(2002.4.1~2004.3.31)

大垣 直明君	北海道工業大学教授
谷 吉雄君	北海学園大学教授
吉野 利幸君	北海道立北方建築総合研究所主任研究員

新任支部監事(2003.6.1~2005.5.31)

伊藤 寛君	道都大学教授
-------	--------

(2003年4月の支部常議員会で選出された)

留任支部監事(2002.6.1~2004.5.31)

井野 智君	北海道情報大学経営情報学部情報学科教授
-------	---------------------

地区委員(2002.6.1~2004.5.31)

帯広地区委員	小野寺 一彦君	設計工房アーバンハウス主宰
函館地区委員	山本 真也君	函館市企画部企画管理課長

3. 支部運営の諸会合の開催

総会

期日 2003年5月16日(金)
会場 北方圏センター国際会議場

常議員会 (複数回)

常任幹事会 (複数回)

選挙管理委員会 (支部役員選挙時に開催する)

4. 学術委員会の活動 (主査: 星野 政幸君)

委員 16名 委員会開催予定数 4回

当支部学術委員会主査は本部学術推進委員会の地域委員として参画して、支部の各専門委員会に向けて情報の伝達をする。当学術委員会は各専門委員会及び特定課題研究委員会からの調査研究の企画・計画及び活動の報告を受ける。また、支部研究発表会実行委員会の企画の審議と承認及び次年度の特定課題研究、本部助成研究及び建築文化週間の募集を行い説明を受けて選考を行う。その他、各専門委員会の活動の横断的な連絡などの役割も担う。

第1回目; 本部学術推進委員会報告(以下本部報告) 各専門委員会・特定課題研究委員会の活動計画、支部研究発表会実行委員会の予定、建築文化週間の実施計画

第2回目; 本部報告、各専門委員会の活動報告、次年度支部研究発表会の開催場所の決定・募集要項その他の検討、大賞候補募集

第3回目; 本部報告、各専門委員会の活動報告、支部研究発表会の募集要項等の決定、次年度の特定課題・建築文化週間の募集

第4回目; 本部報告、次年度の事業計画、予算原案の検討、次年度特定課題研究・建築文化週間の選考、支部研究発表会の特別企画の決定、特定課題研究・建築文化週間の結果報告

4.1 専門委員会の活動

材料施工専門委員会 (主査: 名和 豊春君)

建築の材料・施工に関する情報や意見の交換のほか、支部長から諮問される事項の検討、本部との情報交流や諮問事項の検討、最近の施工現場や特色のある建築物や工事現場の見学会、本部主催講習会への協力や北海道に関連する材料施工部門の研究委員会の提案を行う。具体的な活動予定は以下のとおりである。

1) 本部および支部各種委員会報告と諮問事項の審議

2) 建築学会標準仕様書 JASS 5 および「寒中コンクリート施工指針・同解説」の改定に向けた調査研究および意見交換

3) 「コンクリート構造物の収縮ひび割れ低減技術の現状」に関する講習会の開催(2003年6月16日)

4) 建築物および施工現場の見学会の開催

構造専門委員会 (主査: 武田 寛君)

構成委員数 20名 委員会開催予定数 4回

・講演会 5月27日 米国 S.C. リュ - 先生他 2名

主催 建築学会北海道支部主催で行いたい。

・見学会 具体的には6月の委員会で決める。

・特定課題研究「外壁の外側に設置された軸組ブレースの積雪被害に関する研究」

・都市防災委員会との合同委員会を1, 2回開催

・道内巡回講演会

田沼吉伸委員 テ - マ「超高層ビルの構造デザイン」

環境工学専門委員会 (主査：福島 明君)

構成委員数 25名 委員会開催予定数 5回

学会活動の協議のほか、前年度に引き続き、雪面反射を利用した昼光利用技術、住宅のエネルギー消費特性に加えて、農村建築と農業環境整備をテーマに設定して、研究活動を行う。また、2003年3月開催予定のシンポジウムをきっかけに、地域の住宅建設のあり方を考えることを委員会の継続テーマとして活動することとし、建築文化週間において、「環境教育 自然からちょうだいする2-」と題してセミナーや実習などのイベントを実施する予定である。

建築計画専門委員会 (主査：門谷 眞一郎君)

構成委員数 17名。委員会開催予定数 5回(ネットミーティングを含む)。

活動予定：「特色ある住民参加型の建築計画事例の発掘」をテーマに委員会活動を展開する。特に公共的な施設の計画においては、社会資源の蓄積を図る上でも、地域の人々に愛着を持って活用される建築の在り様が、旧知に勝って求められる時相となっているからである。主にネットワークを活用したフィールドワークを行うと共に、2～3の事例について実地の調査を計画している。2003年度は主に道北地域を対象とし、委員5名ほどで調査に当たる。(実地調査：2003年7月～9月)なお、ネットワークによるフィールドワークは、これを継続的に行う。

都市計画専門委員会 (主査：瀬戸口 剛君)

構成委員数15名、委員会開催予定数4回

今年度は北海道内の都市で大きな課題となっている、まちなか居住に関する研究会を継続する。北海道開発局や北海道庁とともに研究会またはフォーラムの開催を予定している。また、本部都市計画委員会地方都市小委員会との共催で、本州諸都市との比較をテーマにまちなか居住の研究会を行う。また、都市計画の職能のあり方についても勉強会を始める予定である。

歴史意匠専門委員会 (主査：羽深 久夫君)

2003年度は委員交代および新委員を迎え、5回の委員会開催を予定している。本年度も、道内各地における歴史的建造物に関わる調査・発掘、および保存・活用等に積極的に関わり、建築学会として社会や住民に貢献できる方策の検討、行動を行う。2002年度に引き続き、委託研究として稚内市歴史的建造物基礎調査業務を受諾し、研究調査を行う。建築文化週間企画は、「空知地方における歴史的建造物の再生事例をたどる」として10月に開催する。6月の「林雅子展」をはじめとする建築家の展覧会やシンポジウム開催の協賛・協力に関わり、道内高校巡回講演会への講師派遣を行う。

北方系住宅専門委員会 (主査：絵内 正道君)

構成委員数 20名 委員会開催予定数 8回

本年度も一般市民向けの普及活動と、昨年度に委員会で新たに取り組むことにした研究課題について、検討した研究方針に従って具体的に研究活動を進めていく。

(主な活動事業と時期)

1) 一般市民向けの普及活動として、

「社会資産としての住居の育成に向けて」のテーマの中で、古い住宅も大事に手を入れて住み続ける意義について、みんなで考える集会を開催する。時期は、年度内2月までを予定。

2) 今後の研究内容として、現在着手している「住宅の建て替え実態調査」に加えて、次の3テーマについて、WG等を設けて研究に着手する。

- ・北の新しいライフスタイル(身近に「農」のある暮らしなど)
- ・地球環境を考えた住宅の取り組み
- ・徒歩生活圏のまちづくり

3) 学会本部・支部からの諮問に答える打ち合わせ委員会の開催(8回程度を予定)

都市防災専門委員会（主査：岡田 成幸君）

構成委員数 19 名 委員会開催予定数 10 回

本年度もWGに分かれてテーマ毎に活動し、全体会議は2回を予定している。

学術企画WGは雪害や積雪時の地震災害に関するテーマを中心に議論を掘り下げ、意思決定問題WG・避難問題WGと連携を図り特定課題研究申請に取り組む。見学会企画WGはパイプロサイスによる反射法・微動探査の現場見学、モエレ沼公園ガラスピラミッドの現場見学を予定。広報WGはHPの管理と防災ニュースの発行を継続。有珠火山災害WGは、住民復旧支援・調査に重点を置き、特定課題研究担当の有珠復興まちづくりWGを立ち上げる予定。意思決定問題WGは、1991年版の地震被害調査法マニュアルの改訂作業を進める。避難問題WGは、冬期災害時の積雪の影響や行政機関の指導体制に関し検討する予定。

4.2 特定課題研究委員会の実施

研究テーマ自由公募制の研究委員会

(2002年度より)

積雪地昼光利用研究委員会（主査：齊藤 雅也君）

2002年度に引き続き、冬季の積雪面を光源とした室内照明の利用方法やそれにかかわる技術の開発を目的とする研究を継続する予定である。2003年度は、以下の3項目に重点をおいて実施する。1)積雪反射光を想定した窓システムの提案とその性能評価(札幌市立高等専門学校・新規)2)昼光利用を目的としたライトシェルフのある執務室の光環境実測(北海道立北方建築総合研究所・継続)3)昼光利用に関わる簡易ツールの開発(北海道大学・継続)。年間2~3回の委員会の開催と日本建築学会大会および北海道支部研究発表会にて、これまでの研究成果を公表する予定である。また、昼光照明が採用されている建築事例の調査として、中標津にある中学校(設計監理・北海道日建設計)の見学会を検討している。2003年度の構成委員数は7名で、必要に応じて委員を増員する予定である。

北海道住宅エネルギー消費実態調査研究委員会（主査：藤原 陽三君）

2003年度は、過去の調査結果から経年的な用途別燃料消費量の変化を把握し、建物性能の変化や住まい方の変化などについて考察を行う。

また、これらの検討結果から、これからの本道の住宅における省エネルギーの方向性を把握する。

(2003年度より)

都市・建築の安全性評価研究委員会（主査：羽山 広文君）

都市や建築は人々の生活の基盤を支える重要な役割を担っている。高齢化社会へ向かいつつある今日、安全で快適な都市・建築環境が望まれている。住宅において、心疾患および脳血管疾患の発症は浴室およびトイレ内で多くみられ、その数は冬期に顕著となっているといわれている。しかし、その実態は明らかとなっておらず、住宅の室内環境や住宅を取り巻く外部環境と疾病やけがの発症の関係が明確になっているとはいえない。

本研究では、自治体が保有する救急搬送データの記録を入手・分析し、都市や建築に関わる傷病の発生箇所、発生時期・時間、その種類、容態の程度などを調査分析し、傷病の発生と住環境の関係を明らかにする。また、これらの結果を用い、安全と健康を配慮した都市・建築の環境計画の提案を目的に実施する。具体的内容を下記に示す。

1)北海道主要都市の担当者と協議し、救急搬送データを収集し、各自自治体のデータ構造を比較する。

2)救急搬送データを入手した地域の外気温度、天候などの気象データを収集する。

3)疾患およびけがの発生状況を分析し、気象条件、季節、時間帯、場所など、その因果関係を明確にする。

4)建築における室温分布の形成要因を明らかにする。

上記の分析結果を基に、都市・建築の環境改善に向けた提案を行う。

鉄骨軸組ブレース被害調査研究委員会（主査：苫米地 司君）

鉄骨建築の大半を占める低層建築物で柱がH形鋼の場合には柱の弱軸方向は軸組ブレース構造とするのが一般的である。この種の軸組ブレースはアングル、チャンネル、丸鋼等の引張ブレースをガセットプレートに高力ボルト摩擦接合するディテールが用いられている。本研究で対象とする軸組ブレースは、外壁の外側にX形配置される物を主対象とするが、この配置の場合にはアングル、チャンネル等がガセットプレートに一面摩擦接合された場合に地震時のブレースの構面外座屈による外壁損傷を回避できる工夫が可能である。反面、多雪地域においては積雪と屋根からの落下雪による沈降現象等によってブレース材の局部変形、ガセットプレートの面外変形などが生じ、軸組ブレースの耐震性能が低下する危険性を持っている。

本研究では、札幌圏周辺の鋼構造建築物の被害の実態調査により、各種建築ディテールと被害との相関を明らかとすることを目的としている。

4.3 本部からの支部助成金による研究委員会 (2003年度より)

有珠山防災まちづくり計画研究委員会（主査：岡田 成幸君）

1) 研究の必要性

2000年有珠山噴火災害により周辺地域では、建築物、都市施設等に甚大な被害が発生した。人的被害は、事前避難が行われたことにより無かったが、周辺市町（虻田町、壮瞥町、伊達市）の住民1万5千人以上（虻田町では、全世帯の97%約1万人）が避難し、数ヶ月に及ぶ避難生活を強いられる地区もあった。

有珠山は、20世紀には30～50年周期で噴火し、今後も20～30年周期で噴火することが予測されている。このため、北海道および周辺市町は、火山ハザードマップを基に、将来的な災害が予想される地域における抜本的な防災対策を図るため、火山周辺地域の土地利用を考慮した復興計画を策定した。この中で、我が国では初めて土地利用ゾーニングに基づく防災対策方針が盛り込まれ、主要な施策には、将来的な災害が予想される地区の弱者施設（医療、学校など）の移転整備、住居系施設の移転支援策があげられている。

住居の移転策は、居住者にとっては今まで築いてきたコミュニティに重大な影響が及ぶばかりでなく、地区の居住環境の整備やまちづくり計画にも関わる問題である。しかし、支援策の効果や新たなまちづくりの考え方など学術的に十分検討されているとはいえない。

移転支援事業は、平成15年度からの実施が検討されているため、この時期に実施施策に呼応した調査研究が必要である。

2) 研究の目的

本研究は、有珠火山周辺地域を対象として、災害危険区域の土地利用計画手法として住宅の移転策という新たな防災対策手法の有効性や計画のあり方について考察を行う。

3) 研究項目及び方法

1. 火山災害による建物被害評価

GISマップの作成による建物被害評価

2. 住宅移転支援策とコミュニティ形成

住民意向把握及び合意形成手法による計画案の検討

3. 火山災害を軽減するための防災まちづくり計画

移転支援策の被害軽減効果分析による防災まちづくり計画の検討

5. 支部研究発表会の活動

5.1 支部研究発表実行委員会（主査：角 幸博君 委員数18名 委員会開催予定6回）

2003年度の委員任期は、2002年7月1日（第75回研究発表会（室工大）翌日）から2003年6月28日（第76回発表会最終日）である。したがって、2003年度の第76回発表会実施へ向けての委員会活動はすでに開始されている。

1) 委員会開催数：これまでに4回（2002年10月24日、11月12日、1月22日、3月3日）開

催

2) 議事：研究発表会開催会場、期日、特別企画の議論および、本年度から大幅に変更した原稿執筆要領、原稿用紙書式の改訂について議論を行い、発表申込書も含め支部 HP からダウンロードできるようにした。

3) 支部研究発表会の開催予定

原稿提出締切：2003年4月17日(木)12時支部事務局必着

開催期日：2003年6月27日(金)～28日(土)

会場：北海道立北方建築総合研究所(旭川)

原稿募集の会告記事を、建築雑誌2002年12月号～3月号および支部HPに掲載。

6. 表彰

6.1 北海道建築賞

(1) 賞の概要

建築作品をささえる「先進性」、「規範性」、「洗練度」の3つの視点から視察、議論を通して選考し、北海道建築賞の表彰を行い、より一層の建築創作活動の促進を図る。

(2) 北海道建築賞委員会の実施

上記の方針で委員会を実施する。

6.2 卒業設計優秀作品(日本建築学会北海道支部賞)

(1) 賞の概要

大学・短大・高専・専門学校・工高の卒業設計優秀作品の表彰を行い、北海道地域の文化、建築教育の向上を図る。

(2) 卒業設計優秀作品審査委員会の実施

2003年度 道内大学・短大・高専・専門学校・工高卒業設計優秀作品の審査方針を協議し、審査を実施する。

6.3 優秀学生・生徒(日本建築学会北海道支部賞)

大学・短大・高専・工高の優秀学生・生徒の表彰を行い、北海道地域の文化、建築教育の向上を図る。

7. 建築作品発表会の実施

委員3名 実行委員11名 委員会開催数6回(実行委員会2回を含む)

2003年度の目標は、発表の質の向上である。議論の内容を深めるという意味で、作品の発表・討論時間の確保にはある程度成果がみられたが、2002年度より実施した発表形式の変更を再度吟味すると同時に、発表者各自のプレゼンテーションの中身を向上させることができるような、発表要綱をつくるかが課題である。さらに、議論の内容を向上させるためには、設計者あるいは、学生が主であった従来の参加者の幅をその枠にとどまらず、発注者、利用者、あるいは、一般市民の参加も促してゆく工夫が求められる。いずれにしても、北海道の建築の状況を俯瞰できる唯一の機会として存在するこの作品発表会を、昨年度までの良い部分は継続しながら、よりいっそう社会化するための取り組みを行ってゆくことを今年の目標としたい。

また、広く作品の公募を行うため、支部のHPを活用や電子投稿による応募プロセスを検討することも重要な目標としたい。

作品の応募時期：7月下旬～8月下旬

作品発表会開催時期：10月下旬～11月初旬の中の1日間
作品発表会開催場所：道立近代美術館講堂（予定）

8．特別委員会の活動

8．1 事業主査連絡会（事業系5委員会の主査、活性化委員会事業企画部会担当常議員）

事業系5委員会と意思決定機関である常議員会との情報交換を密にし、事業内容の充実と効率化、魅力ある事業企画実施のため、2003年度も引き続き、活動状況、予算執行状況、活動内容と予算計画などに関して検討を行う。また、活性化委員会と連携し、支部活動見直し議論に取り組む。

8．2 総務委員会（主査：後藤 康明君）

構成委員数：5名 開催数：4回

本委員会の目的を遵守して北海道支部事務局運営の健全性を維持する。適時委員会を開催し財務管理・事務局業務管理について検討する。昨今の経済状況により支部の財政状況がさらに悪化していることから、各事業に対して早めの詳細予算策定および事業終了後の決算報告についての提出を厳格にして、見通しのある財務管理を進める予定である。さらに、事務局業務の効率化、会議室の有効利用についても適宜検討を継続的に行っていく。また、日本建築家協会北海道支部との合同事務所の運営、合同企画についても検討を行う。

8．3 活性化委員会（支部長、常議員）

本委員会は、支部活動のあり方・事業の活性化のための対策などの関して議論することを目的として、2001年度に設置された。2002年度までの2部会の議論と成果を踏まえ、2003年度においては、学術委員会活動と事業活動の今後の方向性について、支部財政の見通しを踏まえて集中的に議論・検討を行う。そのため、当委員会の部会構成や委員構成の変更の必要性を含めて、事業主査連絡会と常議員会との連携を強化する。

8．4 ホームページ管理委員会（主査：長谷川雅浩君）

本委員会は当支部のホームページを維持・管理することを目的とする。2003年度は会員間の情報の共有をすすめるとともに広く支部の活動をPRするため、委員会活動状況、及び各種事業の案内・成果等を迅速に広めるなど、内容の充実を図る。

9．講習会・シンポジウム等の開催

本部主催による講習会・講演会のほか、地域の要請にこたえる各種の講演・講習会を、工業高校・自治体および関連諸団体等の協力を得て複数の地域で企画実施する。

9．1 本部主催講習会

2003年度本部主催支部共通事業講習会を開催する。

9．2 講演会

各専門委員会等の主催により、自治体、関係諸団体等の協力を得て企画実施する。

9．3 展示会

卒業設計優秀作品および本部主催設計競技入選作品の展示会、全国大学・高専卒業設計優秀作品巡回展ならびに道内工高卒業設計優秀作品巡回展を実施する。

9．4 見学会

各専門委員会等の主催により、自治体、関係諸団体等の協力を得て企画実施する。

10 . 本部関連事業・その他

10 . 1 2003 年度支部共通事業設計競技の実施

2003 年度の支部共通事業設計競技審査委員会の活動は、本年は7月中旬に実施する予定である。支部共通事業である設計競技の審査を行い、支部入選案を選考する。

10 . 2 作品選集支部選考部会

2003 年度の支部選考部会構成委員数は9名で、ほぼ半数が交代した。部会の開催回数は2回を予定する。昨年度は支部への応募作品が少数であったので、本部での総応募数に準じた計算による支部推薦数も結果的にごく限られたものとなった。そこで本年度は、北海道支部への作品募集を周知徹底し、応募作品数を上げる必要がある。部会は、昨年同様に、本部会議の終了後の応募作品の現地視察の担当や日程の調整時と、推薦作品の絞り込み時を予定する。

10 . 3 建築文化週間

グループセミナーなどを通して地域との研究交流を深め、また建築文化週間などの文化事業を通じて、開かれた学会として社会に対する文化活動の推進を図る。本年度予定している文化関連事業は、以下の2件を予定している。

- 1) 見学会「建築散歩 - 空知地方における歴史的建造物の再生事例をたどる - 空知編」
(責任者：八代 克彦君)
- 2) 「環境教育 自然からちょうだいする」(責任者：福島 明君)

11 . 建築関連団体との活動

11 . 1 AIJ-JIA 合同委員会 (運営委員会、企画委員会)

合同運営委員会では、合同事務所の運営についてこの2年間の反省事項を明らかにして改善すべき点を洗い出し、継続的に協議を行う。特に、昨年提出した要望提案書への対応について継続的に協議する。合同企画委員会では、これまで通り合同の企画の立案・運営を行い、能力開発支援制度(CPD)についても継続的に協議を行う。また、昨年度同様に両団体の関連行事などの企画について継続的な話し合いの場とする予定である。

11 . 2 北海道建築設計会議

設立された本会議を実働させるため、今年度具体的な事項に関する協議が活発化されるので、事業の共同化や5団体共催事業の企画等について、支部として積極的に連携を図る。

12 . 能力開発支援制度の試行運用

2004 年度本格運用のための試行が開始されることから、支部の様々な活動における登録事務の実態と検証を踏まえた支部意見を集約し、本部との連携を図り、本制度の活用に向けた体制の整備に努める。

13 . 2004 年度大会実行委員会

準備委員会推薦の石山祐二大会委員長と城攻実行委員長が常議員会で承認され、実行委員会が始動した。大会は2004年8月29日～31日の3日間で、主会場は北海道大学、また、準備委員会選定のトラベル・エージェンシーが常議員会で承認され、今後は執行部、部会等の組織を構成して、具体的な活動に向かう。

2003 年度収支予算案

日本建築学会北海道支部

収入の部					支出の部				
項目	予算額	前年度	増減	項目	予算額	前年度	増減		
	7,183,000	7,332,000	-149,000		4,990,000	5,280,000	-290,000		
交付金	支部費	1,504,000	1,553,000	-49,000	事業費	調査研究事業費	830,000	950,000	-120,000
	経営助成金	2,760,000	2,850,000	-90,000		表彰関係費	780,000	750,000	30,000
	事業交付金	1,030,000	1,040,000	-10,000		設計競技費	40,000	40,000	0
	支部事務所費	1,589,000	1,589,000	0		卒業設計展示費	40,000	40,000	0
	事務費	300,000	300,000	0		教育文化事業費	500,000	700,000	-200,000
						シボシム等経費	2,800,000	2,800,000	0
				委託調査研究費	0	0	0		
				特別事業費	380,000	0	380,000		
				特別企画事業費	380,000	0	380,000		
	3,055,000	3,010,000	45,000		265,000	280,000	-15,000		
副次収入	シボシム収入	2,400,000	2,400,000	0	会議費	総会費	180,000	160,000	20,000
	調査研究受託収入	0	0	0		役員会費	70,000	70,000	0
	雑収入	650,000	600,000	50,000		運営費	15,000	50,000	-35,000
	収入利息	5,000	10,000	-5,000					
	1,277,385	5,195,737	-3,918,352		5,440,000	5,390,000	50,000		
繰入金	前期繰越金	897,385	795,737	101,648	事務費	人件費	2,100,000	2,040,000	60,000
	基金取崩金	380,000	4,400,000	-4,020,000		通信費	300,000	300,000	0
						印刷費	20,000	50,000	-30,000
						消耗品費	150,000	150,000	0
						雑費	600,000	580,000	20,000
						事務所費	2,270,000	2,270,000	0
				予備金	440,385	4,587,737	-4,147,352		
				予備金	440,385	587,737	-147,352		
				基金積立金	0	4,000,000	-4,000,000		
合計	11,515,385	15,537,737	-4,022,352	合計	11,515,385	15,537,737	-4,022,352		

基金・積立金内訳

2002年度末		2003年度末	
支部基金	3,010,000	支部基金	3,010,000
災害調査研究基金	2,000,000	災害調査研究基金	2,000,000
学術振興基金	4,020,000	学術振興基金	3,640,000
職員退職積立金	60,000	職員退職積立金	180,000

北海道支部地域法人正会員・賛助会員名簿
法人正会員

2003年3月末現在

会員番号	口数	会員社名・団体名	会員番号	口数	会員社名・団体名
00502 -83	1	荒井建設㈱	00547 -58	2	戸田建設㈱
00503 -64	1	伊藤組土建㈱	00552 -83	2	飛鳥建設㈱
00505 -34	2	岩倉建設㈱	00553 -56	1	巴コ・ボレ・シヨン
00505 -50	2	岩田建設㈱	00557 -04	1	日鐵セメント㈱
00512 -71	1	㈱大林組 札幌支店建築工事業部	00614 -45	1	日本データサービス㈱
00512 -89	3	大林組	00555 -50	1	西松建設㈱
00512 -97	1	大林組	00560 -51	1	日本設計
00515 -72	1	岡田設計	00561 -82	1	日本防水総業
00617 -89	1	画工房	00573 -66	1	㈱三菱地所設計
00567 -92	2	北電興業	00625 -81	1	アトリエ・アク
00585 -32	1	加藤組土建 総務部総務課	00586 -89	1	北農設計センター
00517 -00	5	鹿島建設㈱	00597 -74	1	㈱総研設計
00519 -38	1	上遠野建築事務所	00565 -64	1	フジタ
00611 -61	1	曾澤高圧コンクリート技術部	00584 -43	1	萩原建設工業 建築部
00614 -38	1	㈱ホーム企画センター - 総務部	00616 -32	1	北方住文化研究所
00523 -40	1	釧路製作所	00568 -07	1	㈱ドーコン
00523 -82	1	熊谷組	00618 -60	1	北海道建築設計監理㈱
00530 -03	1	札幌日総建	00568 -15	2	北海道コンクリート工業
00568 -23	2	北海道日建設計	00531 -84	1	清水建設㈱
00673 -45	1	桜井鉄鋼	00538 -83	2	田中組
00571 -46	3	丸彦渡辺建設㈱	00545 -54	3	地崎工業
00540 -41	5	大成建設㈱	00674 -50	1	㈱中原建築設計事務所
00575 -10	1	宮坂建設工業	00674 -76	1	㈱間組 札幌支店建築部
00544 -49	2	竹中工務店			

法人正会員・賛助会員

会員番号	口数	会員社名・団体名	会員番号	口数	会員社名・団体名
00577 -80	1	吉田建築設計事務所	00814 -70	3	北海道電力㈱
00650 -00	1	松村組札幌支店	00810 -06	1	道都大学図書館
00656 -02	1	坂本建設㈱	00813 -49	1	㈱NTT ファシリティーズ
00645 -91	1	豊平製鋼㈱			北海道支店営業推進部
00651 -49	1	アイエイ研究所	00815 -01	1	北海学園大学 図書館
00651 -65	1	北文創	00815 -19	1	北海道中央工学院専門学校
00651 -99	1	國枝千秋建築設計事務所	00681 -97	1	青山工学・医療専門学校札幌校
00652 -54	1	新太平洋建設㈱			
00659 -11	1	㈱都市設計研究所			
00662 -76	1	㈱松原組一級建築士事務所			
00666 -08	1	光道路サ ービス㈱ 構造計算課			
00674 -84	1	五洋建設㈱ 札幌支店			
00549 -52	1	東急建設㈱ 札幌支店			
00683 -75	1	三和シャツタ ー工業 北海道ビル建材支店			
00684 -22	1	㈱北海道サンキット			
00684 -14	1	㈱三咲プレコンシステム			
00685 -29	1	不二サツシ ㈱ 北海道支店			
00697 -87	1	夢創計画室			
00702 -09	1	環境計画コンサルタント			
00704 -45	1	アトリエ・ブノク			
00704 -09	2	北海道建築指導センター			
00708 -51	2	北海道旅客鉄道㈱			

社団法人 日本建築学会北海道支部
〒060-0042 札幌市中央区大通西7丁目2
ダイヤビル 2階
TEL 011-219-0702 FAX 011-219-0765
E-mail: aij-hkd@themis.ocn.ne.jp
<http://news-sv.aij.or.jp/hokkaido/>